24. 生存圏研究所

（ 分析項目Ⅰ 研究活動の状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66 ）

（ 分析項目Ⅱ 研究成果の状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67 ）

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

〔判定〕　相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

○　「MU レーダー」、「赤道大気レーダー（EAR）」、「先進素材開発解析システム（ADAM）」など、合計 13 件の大型設備・施設の共同利用を行なっており、第３期中期目標期間において年平均で約 340 件の共同研究を実施している。

〔特色ある点〕

○　産官学連携の推進と新技術の創出を目指して、「宇治キャンパス産学交流会」（主催：京都大学宇治キャンパス産学交流企業連絡会・京都府中小企業技術センター・（公財）京都産業 21、共催：京都大学生存圏研究所・京都やましろ企業オンリーワン倶楽部）を開催し、京都府下の中小企業から多数の参加を得た（延べ参加者 241 名）。

○　地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）（国際協力機構、科学技術振興機構プロジェクト）、 東南アジア諸国連合拠点をハブとした JASTIP（「日 ASEAN 科学技術イノベーション共同研究拠点－持続可能開発研究の推進」）、京都大学研究連携基盤グローバル生存基盤展開ユニット、生存圏研究所アジアリサーチノードにおける活動を継続し、発展途上国からの留学生、外国人教員、外国人共同研究者の受け入れ、教員派遣などを通じた国際貢献と人材育成を推進した。

○　植物有用物質の生化学的・分子生物学的研究や赤道大気の力学過程および大気質に関する国際協同観測など、所員が主導した国際共同研究件数は年間およそ 20 件である。さらに共同利用・共同研究拠点活動の一環として、６つの共同利用項目を国際化し、海外研究者が研究代表者の 15 件の提案を実施した。

○　学際・融合的な公募型研究集会共同利用として「生存圏シンポジウム」を連続開催している。平成 28 年度以降の総数は 102 回であり、参加者は年間平均 2,859 名（期間中総数 11,436 名、うち所内 1,758 名、所外 9,678 名）に達している。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

〔判定〕　相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、２件、３件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。